藪の中

芥川龍之介

青空文庫

檢非違使に問はれたる木樵りの物語

さやうでございます。あの死骸を見つけたのは、わたしに違ひございません。わたしは今朝何時もの通り、裏山の杉を伐りに參りました。すると山陰の藪の中に、あの死骸があつたのでございます。あつた所でございますか？　それは山科の驛路からは、四五町程隔たつて居りませう。竹の中に痩せ杉の交つた、人氣のない所でございます。

死骸は縹の水干に、都風のさび烏帽子をかぶつた儘、仰向けに倒れて居りました。何しろ一刀とは申すものの、胸もとの突き傷でございますから、死骸のまはりの竹の落葉は、蘇芳に滲みたやうでございます。いえ、血はもう流れては居りません。傷口も乾いて居つたやうでございます。おまけに其處には、馬蠅が一匹、わたしの足音も聞えないやうに、べつたり食ひついて居りましたつけ。

太刀か何かは見えなかつたか？　いえ、何もございません。唯その側の杉の根がたに、繩が一筋落ちて居りました。それから、――さうさう、繩の外にも櫛が一つございました。死骸のまはりにあつたものは、この二つぎりでございます。が、草や竹の落葉は、一面に踏み荒されて居りましたから、きつとあの男は殺される前に、餘程手痛い働きでも致したのに違ひございません。何、馬はゐなかつたか？　あそこは一體馬なぞには、はひれない所でございます。何

しろ馬の通ふ路とは、藪一つ隔たつて居りますから。

檢非違使に問はれたる旅法師の物語

あの死骸の男には、確かに昨日遇つて居ります。昨日の、――さあ、午頃でございませう。場所は關山から山科へ、參らうと云ふ途中でございます。あの男は馬に乘つた女と一しよに、關山の方へ歩いて參りました。女は牟子を垂れて居りましたから、顏はわたしにはわかりません。見えたのは唯萩重ねらしい、衣の色ばかりでございます。馬は月毛の、――確か法師髮の馬のやうでございました。丈でございますか？　丈は四寸もございましたか？　――何しろ沙門の事でございますから、その邊ははつきり存じません。男は、――いえ、太刀も帶びて居れば、弓矢も携へて居りました。殊に黒い塗り箙へ、二十あまり征矢をさしたのは、唯今でもはつきり覺えて居ります。

あの男がかやうになろうとは、夢にも思はずに居りましたが、まことに人間の命なぞは、如露亦如電に違ひございません。やれやれ、何とも申しやうのない、氣の毒な事を致しました。

檢非違使に問はれたる放免の物語

わたしが搦め取つた男でございますか？　これは確かに多襄丸と云ふ、名高い盜人でございます。尤もわたしが搦め取つた時には、馬から落ちたのでございませう、粟田口の石橋の上に、うんうん呻つて居りました。時刻でございますか？　時刻は昨夜の初更頃でございます。何時ぞやわたしが捉へ損じた時にも、やはりこの紺の水干に、打出しの太刀を佩いて居りました。唯今はその外にも御覽の通り、弓矢の類さへ携へて居ります。さやうでございますか？　あの死骸の男が持つてゐたのも、――では人殺しを働いたのは、この多襄丸に違ひございません。革を卷いた弓、黒塗りの箙、鷹の羽の征矢が十七本、――これは皆、あの男が持つてゐたものでございませう。はい、馬も仰有る通り、法師髪の月毛でございます。その畜生に落されるとは、何かの因緣に違ひございません。それは石橋の少し先に、長い端綱を引いた儘、路ばたの青芒を食つて居りました。

この多襄丸と云ふやつは、洛中に徘徊する盜人の中でも、女好きのやつでございます。昨年の秋鳥部寺の賓頭盧の後の山に、物詣でに來たらしい女房が一人、女の童と一しよに殺されてゐたのは、こいつの仕業だとか申して居りました。その月毛に乘つてゐた女も、こいつがあの男を殺したとなれば、何處へどうしたかわかりません。差出がましうございますが、それも御詮議下さいまし。

檢非違使に問はれたる媼の物語

はい、あの死骸は手前の娘が、片附いた男でございます。が、都のものではございません。若狭の國府の侍でございます。名は金澤の武弘、年は二十六歳でございました。いえ、優しい氣立でございますから、遺恨なぞ受ける筈はございません。

娘でございますか？　娘の名は眞砂、年は十九歳でございます。これは男にも劣らぬ位勝氣の女でございますが、まだ一度も武弘の外には、男を持つた事はございません。顏は色の淺黑い、左の眼尻に黒子のある、小さい瓜實顏でございます。

武弘は昨日娘と一しよに、若狭へ立つたのでございますが、こんな事になりますとは、何と云ふ因果でございませう。しかし娘はどうなりましたやら、壻の事はあきらめましても、これだけは心配でなりません。どうかこの姥が一生のお願ひでございますから、たとひ草木を分けましても、娘の行方をお尋ね下さいまし。何に致せ憎いのは、その多襄丸とか何とか申す、盜人のやつでございます。壻ばかりか、娘までも、……（跡は泣き入りて言葉なし。）

多襄丸の白状

あの男を殺したのはわたしです。しかし女は殺しはしません。では何處へ行つたのか？　そ

れはわたしにもわからないのです。まあ、お待ちなさい。いくら拷問にかけられても、知らない事は申されますまい。その上わたしもかうなれば、卑怯な隠し立てはしないつもりです。

わたしは昨日の午少し過ぎ、あの夫婦に出會ひました。その時風の吹いた拍子に、牟子の垂絹が上つたものですから、ちらりと女の顔が見えたのです。ちらりと、——見えたと思ふ瞬間には、もう見えなくなつたのですが、一つにはその爲もあつたのでせう、わたしにはあの女の顔が、女菩薩のやうに見えたのです。わたしはその咄嗟の間に、たとひ男は殺しても、女は奪はうと決心しました。

何、男を殺すなぞは、あなた方の思つてゐるやうに、大した事ではありません。どうせ女を奪ふとなれば、必、男は殺されるのです。唯わたしは殺す時に、腰の太刀を使ふのですが、あなた方は太刀を使はない、唯權力で殺す、金で殺す、どうかするとお爲ごかしの言葉だけでも殺すでせう。成程血は流れない、男は立派に生きてゐる、——しかしそれでも殺したのです。罪の深さを考へて見れば、あなた方が悪いか、わたしが悪いか、どちらが悪いかわかりません。

（皮肉なる微笑）

しかし男を殺さずとも、女を奪ふ事が出來れば、別に不足はない譯です。いや、その時の心もちでは、出來るだけ男を殺さずに、女を奪はうと決心したのです。が、あの山科の驛路では、とてもそんな事は出來ません。そこでわたしは山の中へ、あの夫婦をつれこむ工夫をしました。

これも造作はありません。わたしはあの夫婦と途づれになると、向うの山には古塚がある、

その古塚を發いて見たら、鏡や太刀が澤山出た、わたしは誰も知らないやうに、山の陰の藪の中へ、さう云ふ物を埋めてある、もし望み手があるならば、どれでも安い値に賣り渡したい、――と云ふ話をしたのです。男は何時かわたしの話に、だんだん心を動かし初めました。それから、――どうです、慾と云ふものは、恐しいではありませんか？　それから半時もたたない内に、あの夫婦はわたしと一しよに、山路へ馬を向けてゐたのです。

わたしは藪の前へ來ると、寶はこの中に埋めてある、見に來てくれと云ひました。男は慾に渇いてゐますから、異存のある筈はありません。が、女は馬も下りずに、待つていると云ふのです。又あの藪の茂つてゐるのを見ては、さう云ふのも無理はありますまい。わたしはこれも實を云へば、思ふ壺にはまつたのですから、女一人を殘した儘、男と藪の中へはひりました。

藪は少時の間は竹ばかりです。が、半町程行つた所に、やや開いた杉むらがある、――わたしの仕事を仕遂ぐるのには、これ程都合の好い場所はありません。わたしは藪を押し分けながら、寶は杉の下に埋めてあると、尤もらしい※をつきました。男はわたしにさう云はれると、もう痩せ杉が透いて見える方へ、一生懸命に進んで行きます。その内に竹が疎らになると、何本も杉が竝んでゐる、――わたしは其處へ來るが早いか、いきなり相手を組み伏せました。男も太刀を佩いてゐるだけに、力は相當にあつたやうですが、不意を打たれてはたまりません。忽ち一本の杉の根がたへ、括りつけられてしまひました。繩ですか？　繩は盜人の難有さに、何時塀を越えるかわかりませんから、ちやんと腰につけてゐたのです。勿論聲を出させない爲

にも、竹の落葉を頬張らせれば、外に面倒はありません。

わたしは男を片附けてしまふと、今度は又女の所へ、男が急病を起したらしいから、見に來てくれと云ひに行きました。これも圖星に當つたのは、申し上げるまでもありますまい。女は市女笠を脱いだ儘、わたしに手をとられながら、藪の奥へはひつて來ました。所が其處へ來て見ると、男は杉の根に縛られてゐる、――女はそれを一目見るなり、何時の間に懐から出してゐたか、きらりと小刀を引き抜きました。わたしはまだ今までに、あの位氣性の烈しい女は、一人も見た事がありません。もしその時でも油斷してゐたらば、一突きに脾腹を突かれたでせう。いや、それは身を躱した所が、無二無三に斬り立てられる内には、どんな怪我も仕兼ねなかつたのです。が、わたしも多襄丸ですから、どうにかかうにか太刀も拔かずに、とうとう小刀を打ち落しました。いくら氣の勝つた女でも、得物がなければ仕方がありません。わたしはとうとう思ひ通り、男の命は取らずとも、女を手に入れる事は出來たのです。

男の命は取らずとも、――さうです。わたしはその上にも、男を殺すつもりはなかつたのです。所が泣き伏した女を後に、藪の外へ逃げようとすると、女は突然わたしの腕へ、氣違ひのやうに縋りつきました。しかも切れ切れに叫ぶのを聞けば、あなたが死ぬか夫が死ぬか、どちらか一人死んでくれ、二人の男に恥を見せるのは、死ぬよりもつらいと云ふのです。いや、その内どちらにしろ、生き殘つた男につれ添ひたい、――さうも喘ぎ喘ぎ云ふのです。わたしはその時猛然と、男を殺したい氣になりました。

（陰鬱なる興奮）

こんな事を申し上げると、きっとわたしはあなた方より殘酷な人間に見えるでせう。しかしそれはあなた方が、あの女の顔を見ないからです。殊にその一瞬間の、燃えるやうな瞳を見ないからです。わたしは女と眼を合せた時、たとひ神鳴に打ち殺されても、この女を妻にしたいと思ひました。妻にしたい、――わたしの念頭にあつたのは、唯かう云ふ一事だけです。これはあなた方の思ふやうに、卑しい色慾ではありません。もしその時色慾の外に、何も望みがなかつたとすれば、わたしは女を蹴倒しても、きつと逃げてしまつたでせう。男もさうすればわたしの太刀に、血を塗る事にはならなかつたのです。が、薄暗い藪の中に、ぢつと女の顔を見た刹那、わたしは男を殺さない限り、此處は去るまいと覺悟しました。

しかし男を殺すにしても、卑怯な殺し方はしたくありません。わたしは男の縄を解いた上、太刀打ちをしろと云ひました。（杉の根がたに落ちてゐたのは、その時捨て忘れた縄なのです。）男は血相を變へた儘、太い太刀を引き抜きました。と思ふと口も利かずに、憤然とわたしへ飛びかかりました。――その太刀打ちがどうなつたかは、申し上げるまでもありますまい。わたしの太刀は二十三合目に、相手の胸を貫きました。二十三合目に、――どうかそれを忘れずに下さい。わたしは今でもこの事だけは、感心だと思つてゐるのです。わたしと二十合斬り結んだものは、天下にあの男一人だけですから。（快活なる微笑）

わたしは男が倒れると同時に、血に染まつた刀を下げたなり、女の方を振り返りました。すると、――どうです、あの女は何處にもゐないではありませんか？　わたしは女がどちらへ逃

げたか、杉むらの間を探して見ました。が、竹の落葉の上には、それらしい跡も殘つてゐません。又耳を澄ませて見ても、聞えるのは唯男の喉に、斷末魔の音がするだけです。

事によるとあの女は、わたしが太刀打を始めるが早いか、人の助けでも呼ぶ爲に、藪をくぐつて逃げたのかも知れない。――わたしはさう考へると、今度はわたしの命ですから、太刀や弓矢を奪つたなり、すぐに又もとの山路へ出ました。其處にはまだ女の馬が、靜かに草を食つてゐます。その後の事は申し上げるだけ、無用の口數に過ぎますまい。唯、都へはいる前に、太刀だけはもう手放してゐました。――わたしの白狀はこれだけです。どうせ一度は樗の梢に、懸ける首と思つてゐますから、どうか極刑に遇はせて下さい。（昂然たる態度）

清水寺に來れる女の懺悔

――その紺の水干を着た男は、わたしを手ごめにしてしまふと、縛られた夫を眺めながら、嘲るやうに笑ひました。夫はどんなに無念だつたでせう。が、いくら身悶えをしても、體中にかかつた繩目は、一層ひしひしと食ひ入るだけです。わたしは思はず夫の側へ、轉ぶやうに走り寄りました。いえ、走り寄らうとしたのです。しかし男は咄嗟の間に、わたしを其處へ蹴倒しました。丁度その途端です。わたしは夫の眼の中に、何とも云ひやうのない輝きが、宿つてゐるのを覺りました。何とも云ひやうのない、――わたしはあの眼を思ひ出すと、今でも身

震ひが出ずにはゐられません。口さへ一言も利けない夫は、その刹那の眼の中に、一切の心を傳へたのです。しかも其處に閃いてゐたのは、怒りでもなければ悲しみでもない、――唯わたしを蔑んだ、冷たい光だつたではありませんか？　わたしは男に蹴られたよりも、その眼の色に打たれたやうに、我知らず何か叫んだぎり、とうとう氣を失つてしまひました。

その内にやつと氣がついて見ると、あの紺の水干の男は、もう何處かへ行つてゐました。跡には唯杉の根がたに、夫が縛られてゐるだけです。わたしは竹の落葉の上に、やつと體を起したなり、夫の顔を見守りました。が、夫の眼の色は、少しもさつきと變りません。やはり冷たい蔑みの底に、憎しみの色を見せてゐるのです。恥しさ、悲しさ、腹立たしさ、――その時のわたしの心の中は、何と云へば好いかわかりません。わたしはよろよろ立ち上りながら、夫の側へ近寄りました。

「あなた。もうかうなつた上は、あなたと御一しよには居られません。わたしは一思ひに死ぬ覺悟です。しかし、――しかしあなたもお死になすつて下さい。あなたはわたしの恥を御覽になりました。わたしはこのままあなた一人、お殘し申す譯には參りません。」

わたしは一生懸命に、これだけの事を云ひました。それでも夫は忌はしさうに、わたしを見つめてゐるばかりなのです。わたしは裂けさうな胸を抑へながら、夫の太刀を探しました。が、あの盜人に奪はれたのでせう、太刀は勿論弓矢さへも、藪の中には見當りません。しかし幸ひ小刀だけは、わたしの足もとに落ちてゐるのです。わたしはその小刀を振り上げると、もう一

度夫にかう云ひました。

「ではお命を頂かせて下さい。わたしもすぐにお供します。」

夫はこの言葉を聞いた時、やつと唇を動かしました。勿論口には笹の落葉が、一ぱいにつまつてゐますから、聲は少しも聞えません。が、わたしはそれを見ると、忽ちその言葉を覺りました。夫はわたしを蔑んだ儘、「殺せ」と一言云つたのです。わたしは殆ど夢うつつの内に、夫の縹の水干の胸へ、ずぶりと小刀を刺し通しました。

わたしは又この時も、氣を失つてしまつたのでせう。やつとあたりを見まはした時には、夫はもう縛られた儘、とうに息が絶えてゐました。その蒼ざめた顔の上には、竹に交つた杉むらの空から、西日が一すぢ落ちてゐるのです。わたしは泣き聲を呑みながら、死骸の繩を解き捨てました。さうして、――さうしてわたしがどうなつたか？　それだけはもうわたしには、申し上げる力もありません。兎に角わたしはどうしても、死に切る力がなかつたのです。小刀を喉に突き立てたり、山の裾の池へ身を投げたり、いろいろな事もして見ましたが、死に切れずにかうしてゐる限り、これも自慢にはなりますまい。（寂しき微笑）わたしのやうに腑甲斐ないものは、大慈大悲の觀世音菩薩も、お見放しなすつたものかも知れません。しかし夫を殺したわたしは、盜人の手ごめに遇つたわたしは、一體どうすれば好いのでせう？　一體わたしは、――わたしは、――（突然烈しき歔欷）

巫女の口を借りたる死靈の物語

――盜人は妻を手ごめにすると、其處へ腰を下した儘、いろいろ妻を慰め出した。おれは勿論口は利けない。體も杉の根に縛られてゐる。が、おれはその間に、何度も妻へ目くばせをした。この男の云ふ事を眞に受けるな、何を云つても※と思へ、――おれはそんな意味を傳へたいと思つた。しかし妻は悄然と笹の落葉に坐つたなり、ぢつと膝へ目をやつてゐる。それがどうも盜人の言葉に、聞き入つてゐるやうに見えるではないか？　おれは妬しさに身悶えをした。が、盜人はそれからそれへと、巧妙に話を進めてゐる。一度でも肌身を汚したとなれば、夫との仲も折り合ふまい。そんな夫に連れ添つてゐるより、自分の妻になる氣はないか？　自分はいとしいと思へばこそ、大それた眞似も働いたのだ、――盜人はとうとう大膽にも、さう云ふ話さへ持ち出した。

盜人にかう云はれると、妻はうつとりと顏を擡げた。おれはまだあの時程、美しい妻は見た事がない。しかしその美しい妻は、現在縛られたおれを前に、何と盜人に返事をしたか？　おれは中有に迷つてゐても、妻の返事を思ひ出す毎に、嗔恚に燃えなかつたためしはない。妻は確かにかう云つた、――「では何處へでもつれて行つて下さい。」（長き沈默）

妻の罪はそれだけではない。それだけならばこの闇の中に、今程おれも苦しみはしまい。しかし妻は夢のやうに、盜人に手をとられながら、藪の外へ行かうとすると、忽ち顏色を失つ

たなり、杉の根のおれを指さした。「あの人を殺して下さい。わたしはあの人が生きてゐては、あなたと一しよにはゐられません。」――妻は氣が狂つたやうに、何度もかう叫び立てた。「あの人を殺して下さい。」――この言葉は嵐のやうに、今でも遠い闇の底へ、まつ逆様におれを吹き落さうとする。一度でもこの位憎むべき言葉が、人間の口を出た事があらうか？　一度でもこの位呪はしい言葉が、人間の耳に觸れた事があらうか？　一度でもこの位。――（突然迸る如き嘲笑）その言葉を聞いた時は、盗人さへ色を失つてしまつた。「あの人を殺して下さい。」――妻はさう叫びながら、盗人の腕に縋つてゐる。盗人はぢつと妻を見た儘、殺すとも殺さぬとも返事をしない。――と思ふ思はない内に、妻は竹の落葉の上へ、唯、一蹴りに蹴倒された。（再、迸る如き嘲笑）盗人は靜かに両腕を組むと、おれの姿へ眼をやつた。「あの女はどうするつもりだ？　殺すか、それとも助けてやるか？　返事は唯頷けば好い。殺すか？」――おれはこの言葉だけでも、盗人の罪は赦してやりたい。（再、長き沈黙）

妻はおれがためらふ内に、何か一聲叫ぶが早いか、忽ち藪の奥へ走り出した。盗人も咄嗟に飛びかかつたが、これは袖さへ捉へなかつたらしい。おれは唯、幻のやうに、さう云ふ景色を眺めてゐた。

盗人は妻が逃げ去つた後、太刀や弓矢を取り上げると、一箇所だけおれの縄を切つた。「今度はおれの身の上だ。」――おれは盗人が藪の外へ、姿を隠してしまう時に、かう呟いたのを覺えてゐる。その跡は何處も靜かだつた。いや、まだ誰かの泣く聲がする。おれは縄を解きな

がら、ぢつと耳を澄ませて見た。が、その聲も氣がついて見れば、おれ自身の泣いてゐる聲だつたではないか？　（三度、長き沈默）

おれはやつと杉の根から、疲れ果てた體を起した。おれの前には妻が落した、小刀が一つ光つてゐる。おれはそれを手にとると、一突きにおれの胸へ刺した。何か腥い塊がおれの口へこみ上げて來る。が、苦しみは少しもない。唯胸が冷たくなると、一層あたりがしんとしてしまつた。ああ、何と云ふ靜かさだらう。この山陰の藪の空には、小鳥一羽囀りに來ない。唯杉や竹の杪に、寂しい日影が漂つてゐる。日影が、——それも次第に薄れて來る。もう杉や竹も見えない。おれは其處に倒れた儘、深い靜かさに包まれてゐる。

その時誰か忍び足に、おれの側へ來たものがある。おれはそちらを見ようとした。が、おれのまはりには、何時か薄闇が立ちこめてゐる。誰か、——その誰かは見えない手に、そつと胸の小刀を拔いた。同時におれの口の中には、もう一度血潮が溢れて來る。おれはそれぎり永久に、中有の闇へ沈んでしまつた。……

（大正十年十二月作）

青空文庫情報

底本：「現代日本文學全集　第三〇篇　芥川龍之介集」改造社
　　1928（昭和3）年1月9日発行
初出：「新潮」
　　1922（大正11）年1月1日
※表題は底本では、「藪《やぶ》の中《なか》」となっています。
入力：高柳典子
校正：岡山勝美
2012年2月8日作成
2012年3月25日修正
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

藪の中

芥川龍之介

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/